

ブルネイ・ダルサラーム国における 一村一品運動の取り組み

シンガポール事務所所長補佐 中村 真知子(宮崎県派遣)

はじめに

ブルネイ・ダルサラーム国（以下「ブルネイ」）は、首都バンダル・スリ・ブガワンを中心とした、国土5,800km²程の立憲君主制の国です。国土の約80%が熱帯雨林のジャングルであるこの地に、人口40.6万人（外国人を含む。2009年）が暮らしています。石油・天然ガス資源に恵まれ、1人あたりのGDPは高く（2009年統計で約2.8万米ドル。ASEAN10カ国中シンガポールに次いで第2位）、それら天然資源の輸出により得られた収入をもとに、政府は医療サービスなどの社会福祉を充実させています。



地域特産開発（一村一品運動）に関する専門家の派遣

ブルネイの経済は、輸出の約9割、GDPの約5割、政府収入の約9割を占める石油・天然ガス部門の動向に大きく左右される構造になっています。このため、政府はエネルギー資源への過度の依存から脱却

すべく、経済構造の多様化を目指しており、その一環として、地元の特産品を生かした一村一品運動を通して新たな産業を育成しようとする試みが行われています。この運動を通して、地元産品の生産および販売促進が行われていますが、生産技術やマーケティングに関する住民の知識が不足していることに加え、品質が不安定であるという品質管理面での課題にも直面しています。

これらの課題を解決するため、ブルネイ内務省は、一村一品運動に関する日本の専門家の派遣を当協会に要請しました。これを受け、当協会では「自治体国際協力専門家派遣事業」(注)により、2010年12月11日(土)から2010年12月23日(木)まで、同運動の先駆けと言える大分県から県職員の朝来壮一氏を現地へ派遣し、約2週間にわたって現地指導や講義等を行いました。

(注) 自治体国際協力専門家派遣事業：海外の自治体等の要請に基づき、それらの分野の専門的な技術や知識を持つ自治体職員（OBを含む）を海外へ派遣し、海外自治体等が抱える課題の解決のための指導・助言を行う事業。

各村の取り組み例

ブルネイは、ブルネイ・ムアラ (Brunei and Muara District)、トゥトン (Tutong District)、ブライト (Belait District)、トゥンブロン (Temburong District) の4つの地区より成り、各地区の村ごとに地元の素材を使ったもの作りが行われています。ここでは、ブルネイ・ムアラ地区の2つの村の取り組みを簡単に紹介します。

《ブルネイ・ムアラ地区：ジュルドン》

この村では、ブルネイ産の竹を使い、背中に背負う籠やペンケース、小物入れといった様々な竹工芸品が作られており、国内向けだけではなく、外国人旅行者向けにも販売されています。製品の素材や造りは優れていますが、一般的に派手な色を好むブルネイ人の感覚で作られている製品が多く、朝来氏からは「外国人旅行者をターゲットにするのであれば、



カラフルな色とデザインが印象的な竹工芸品

デザインのバリエーションを増やす必要があり、ホテルやデパート、空港などで製品を販売し、消費者の反応や嗜好を知ることが必要」とのアドバイスをいただきました。

《ブルネイ・ムアラ地区：ガドン》

人口4,000人のこの村では、各家庭が2種類のマンゴーの木を育てており、生果としての販売のほか、ジュースやドライマンゴーなどの加工品作りが行われています。加工品には、生果としては販売できないマンゴーを使用しているとのことでしたが、日本の果樹栽培者であれば必ず持っている糖度計がこの村にはなく、生果として販売できるかどうかの判断を自分たちの感覚だけで行っていました。そのため、市場に出るマンゴーの糖度はまちまちです。安定した品質を保ち、それによって消費者の信頼を得るた



マンゴーの加工品を専門家（右）に紹介

めにも、朝来氏からは「市場に出すマンゴーの糖度の基準を定め、糖度計による検査で基準を上回ったもののみを市場に出すように」との助言がなされました。

見えてきた課題

一村一品運動に携わる住民の多くが産品を輸出したいとの強い希望を持っており、その可能性や課題について専門家に尋ねる場面が多く見られました。しかし、まずは商品のコンセプトや品質、生産量をきちんと整理し、国内市場においてテストマーケテ

ィングを行うことが重要で、輸出は最終的な目標に据えるべき、と朝来氏は指摘します。

マンゴーやジャムの糖度が不安定で、賞味期限も独自の判断基準で設定されている現状では、商品づくりの基本である「安心・安全」なもののづくりとは言えません。何時、誰が作っても同じものができるという均一化された基本技術の確立が必要で、技術の継承という意味においても、マニュアル作りが必要である、と朝来氏は強調しました。同時に、香港やシンガポールなどで開催される展示会に出展し、専門知識を持つバイヤーに商品の品質や価格について客観的に正しく評価してもらうことも、品質向上を図る上では欠かせないようです。

なるべく行政に頼らず、自分たちで挑戦して失敗して、その結果を考察して、再度挑戦する、この繰り返しの中で自分たちの技術が作られていき、そして、技術が確立し、品質が向上していく中で、他国の同製品とどのように差別化を図っていくか、徐々に道筋が見えてくるように思います。マンゴーにしても、竹工芸品にしても、すでにフィリピンやタイ、ベトナムといった国々において、安い人件費で大量生産され、各国に輸出されています。他国より安価で販売するのか、高額でも希少価値のある製品として販売するのか、今後は自分たちの製品にいかにつ加価値を付けて市場に出せるかが課題になりそうです。

おわりに

ブルネイにおいては、新たな産業を育成し、かつ、住民の創意工夫の意識を引き出す効果を持つ一村一品運動には、国中が高い関心と期待を寄せており、それを裏付けるように、今回の指導期間中、ブルネイ国内の地元新聞紙は朝来氏による視察や講義の様子を連日のように取り上げ、国営テレビでもトップニュースで報じられました。

ブルネイにおける一村一品運動の最終目標を「産品の輸出」と考えるならば、目標達成までの道のりはこれからというのが現状です。当事務所では、朝来氏による今回の指導の成果を踏まえ、今後とも適宜適切なフォローアップを行っていきたいと考えています。

海外生活 だより

シンガポール事務所

多民族国家シンガポールの祝日

シンガポール事務所所長補佐 小島 悠可(仙台市派遣)

ある休日のこと

シンガポールのゲイランセライ地区、マレー系住民が多いこの地区で、私はカメラ片手に少しドキドキしながら、イスラム教の儀式を覗いていました。

この日は2010年11月17日。ハリ・ラヤ・ハッジという祝日です。この儀式は犠牲祭と呼ばれ、羊や牛の肉を屠り、これらを貧しい家庭にも分け与える「喜捨」(注1)が行われます。犠牲祭の起源は、その昔、預言者アブラハムが神への忠誠心を示すため、息子のイスマイルを生贄に捧げようとし、信仰心を認めた神が代わりに子羊を生贄にさせたというコーラン(クルアーン)の逸話にあります。日本ではなかなか触れることのできないイスラムの世界を、垣間見ることができた一日でした。



「ハリ・ラヤ・ハッジ」の犠牲祭の一コマ

多民族国家であるシンガポールの祝日は、民族や宗教の多様性をよく表しています。今回は、そんなシンガポールの祝日をいくつか紹介します。

祝日制定の背景

シンガポールは、総人口約507万人(2010年6月末時点)(注2)のうち、国民等(国民と永住権を持つ外国人)は約377万人であり、中華系(74.1%)、マレー系(13.4%)、インド系(9.2%)が主要な民族となっています。公用語は一般的な共通語である英語のほか、中国語、マレー語、タミル語となっています。

この国が1965年にマレーシア連邦から独立した頃は、社会不安や混乱が広がり、民族間での衝突や対

図1 シンガポール国民等の民族構成

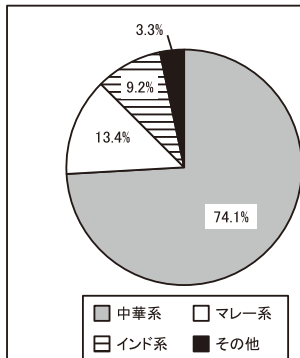
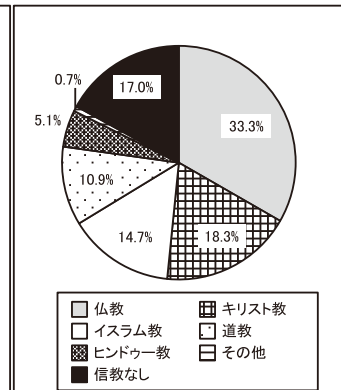


図2 シンガポール国民等の宗教信仰構成



(「CENSUS of population 2010 Advance Census Release」より作成) (「CENSUS of population 2010 Statistical Release 1」より作成)

立も多く見られました。しかし、国土が狭く資源も乏しいこの国において、民族同士が融和・共存し、一丸となって経済発展を目指す必要性から、互いの信仰・儀礼の尊重が図られました。シンガポールには年間11日の祝日(注3)があり、その多くが信仰に密接に関連しています。

多民族社会を映すシンガポールの祝日

■【イスラム教】ハリ・ラヤ・プアサ

ハリ・ラヤ・プアサは、上述のハリ・ラヤ・ハッジとともに、イスラム教の二大祝祭とされるもので、1カ月間続いたラマダン(断食)明けとともに到来するイスラム暦の新年を祝います。断食といっても

表 2011年 シンガポールの祝日

月 日	名 称	備 考
1月1日	ニューイヤーズ・デー	太陽暦の正月
2月3、4日	チャイニーズ・ニューイヤー	太陰暦の正月(旧正月)
4月22日	グッド・フライデー	キリスト教
5月1日	レイバー・デー	労働者の日・メーデー
5月17日	ベサック・デー	仏教
8月9日	ナショナルデー	独立記念日
8月30日	ハリ・ラヤ・プアサ	イスラム教
10月26日 ^(※)	ディーバ・バリ	ヒンドゥー教
11月6日	ハリ・ラヤ・ハッジ	イスラム教
12月25日	クリスマス	キリスト教

※インド暦により変更可能性あり。

完全に絶食するというわけではなく、基本的に早朝から日没までであり、日が暮れるとレストランへ出かける姿も見られます。

■【ヒンドゥー教ほか】ディーパ・バリ

国民等人口の9.2%を占めるインド系住民にとって新年ともいえるディーパ・バリは、神（光）が悪（闇）に勝利したことを祝う「光の祭典」を意味します。



街を彩る「ディーパ・バリ」のイルミネーション
@リトルインディア

インド人街の大通りにはきらびやかなアーチが飾られ、これに合わせて開催されるバザーは、祝祭の装飾品や伝統的なお菓子、そしてスパイスの香りで満たされます。

なお、祝日ではありませんが、タイプーサム（注4）というかなりインパクトの高いヒンドゥー教の祝祭もあります。神への祈りと感謝を捧げる信者が、カバディと呼ばれる御神輿を、太い針を体に刺して支え、踊りながら街を行進するというものです。

■【仏教】ベサック・デー

仏教の開祖、釈迦の生誕を祝う日です。人々は、花やフルーツなどお供えものを持って寺院にお参りに行きます。

■【キリスト教】グッドフライデー、クリスマス

シンガポールはかつてイギリスの植民地だったこともあり、キリスト教信者の割合は18.3%を占めています。キリスト教の祝日としては、グッドフライデーとクリスマスがあります。

グッドフライデーは、十字架に架けられたキリストの受難の日を記念する日です。

日本でもおなじみのクリスマスの時期には、あちこちで趣向を凝らしたツリーが飾られます。特にシンガポール随一のショッピングエリアであるオーチャードロードでは、毎年様々なイルミネーションが私たちの目を楽しませてくれます。とはいえ、街行く人々の多くが半袖・短パン・ビーチサンダルという南国スタイルのため、ロマンティックというよりも、にぎやかな夏祭りのようです。

■【その他】チャイニーズ・ニューイヤー、ナショナルデー

国民等人口の4分の3を中華系が占めるシンガポ

ールでは、チャイニーズ・ニューイヤー（旧正月）（注5）が最大の祝日となっています。この前後には、チンゲイ・パレードやリバー・ホンバオといった華やかなフェスティバルが開催され、街中も赤を基調とした正月飾りで彩られます。

最後に、ナショナルデーを紹介します。8月9日はシンガポールの独立記念日に当たり、多様な民族や宗教を超え、同じ「シンガポール人」としての一体感を高揚させる盛大な式典が行われます。シンガポール国軍による戦車のパレードや航空ショーなどが催され、国のさらなる発展を祈念します。

このように、それぞれのエスニシティにとって大切な儀礼の日を基調としながら、多様な背景を有する日が祝日とされています。

祝日を通して見えるもの

祝日は、祝祭に関連の薄い人にとっては単なる休みの日かもしれませんが、その背景にある文化や宗教、そしてシンガポールについて深く認識する良いきっかけを与えてくれます。

宗教の祝祭という少々近寄りがたいイメージもありますが、これらには一般見物客も多く、シンガポール政府観光局もこの多様性をひとつの観光資源としてPRしています。みなさんも機会があればぜひ祝祭を覗いてみてください。

最近では、世界最大の観覧車・シンガポールフレイヤーや、カジノ複合リゾート・マリーナベイサンズ、また、ユニバーサル・スタジオ・シンガポールがオープンし、観光地としてますますホットになったシンガポールですが、実際にフェスティバルや儀礼を目にすれば、よりディープなシンガポールの姿を感じることができるはずです。

（注1）イスラム教信仰の根幹である六信五行のひとつ。六信五行とは、イスラム教徒が信ずるべきとされる6つのことと、義務とされる5つ（信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼）の行いのこと。

（注2）「CENSUS of population 2010 Advance Census Release」（シンガポール統計局）出典。

（注3）これらの祝日の中には、インド、マレーシアでも、州法等によって祝日とされている場合もあります。

（注4）ヒンドゥー暦タイ月に、シヴァ神の息子、ムルガン神を称えます。

（注5）詳細は2008年5月号「シンガポールの旧正月」（http://www.clair.org.sg/j/forum/200805_sin.pdf）をご参照ください。

日印地域間交流促進プログラム 実施報告

シンガポール事務所所長補佐 矢島 浩輔(大田区派遣)

当協会は、全国市町村国際文化研修所、地域国際化協会連絡協議会と共催で、2010年11月24日(水)から2010年12月4日(土)まで、インド視察ミッション「日印地域間交流促進プログラム」を実施しましたので、その概要を報告します。

はじめに

本事業は、1990年代以降、飛躍的な経済成長を背景に国際的なプレゼンスを急速に高めているインドに、地方自治体職員や地域国際化協会の職員等を派遣し、政府機関、企業等の訪問や市民との交流などを通じて、日印間の政治経済・文化交流等における現状と課題を多方面から理解し、今後の日印の地域間交流の契機とするとともに、国際感覚の涵養を図ることを目的として実施しました。日本からは7団体9名、ASEAN地域を所管する海外駐在員からは3団体3名が参加しました(表1参照)。

表1 プログラム参加者内訳

日本からの参加自治体 など	香川県丸亀市 沖縄県那覇市 大阪府堺市 福岡県北九州市(3名) 岩手県 (財)名古屋国際センター (財)長崎県国際交流協会
海外駐在員事務所等 からの参加自治体	静岡県(シンガポール) 愛知県(上海) 長野県(香港)

実施概要

今回は、政治の中心地首都ニューデリー、インド最大の人口を誇る経済都市ムンバイ、世界のIT企業の一大集積地であるバンガロールの3都市を訪問して、政治、経済、教育、日本の国際協力など、インドの現状を幅広く見聞できる内容としました(表2参照)。

ニューデリーでは、日本の政府機関によるインドの概要説明や、日本の政府開発援助(ODA)等により建設され、市民の交通手段として定着している地下鉄“デリーメトロ”を訪れ、説明を受けるとともに、実際に乗車して日本の国際協力の取り組みについて理解を深めました。また、インド日本商工会を中心とした現地関係者との交流会を開催し、現地の最新の情報等をお話いただきました(ムンバイでも同様の交流会を開催)。

11月30日(火)に国際交流基金との共催で開催した現地市民との文化交流事業では、インドで日



文化交流事業の様子

表2 日程表

月日	都市名	時間	日程
11/28 (日)	ニューデリー等	終日	国立博物館等視察
		夜	海外オリエンテーション
11/29 (月)	ニューデリー	午前	在インド日本国大使館
		午後	JICAインド事務所 デリーメトロ視察
		夜	現地関係者との交流会
11/30 (火)	ニューデリー	終日	国際交流基金ニューデリー文化 センター 現地市民との文化交流事業
12/1 (水)	ニューデリー発 ムンバイ着	午前	移動
		午後	現地経済シンクタンク
		夜	現地関係者との交流会
12/2 (木)	ムンバイ発 バンガロール着	午前	ボンベイ証券取引所 ムンバイ市役所
		午後	小売施設視察 移動
12/3 (金)	バンガロール発	午前	インフォシステクノロジーズ 現地工科大学院視察
		午後	現地進出日系企業視察
		夜	解団式 移動

※11月24日(水)～11月26日(金)は、全国市町村国際文化研修所で、インドの基礎知識の習得を目的とした国内研修を実施。

※11月27日(土)、12月4日(土)は移動日。

本語を学ぶ学生たちを招き、日印両国の参加者が、それぞれ自国の文化や習慣、日常生活などをテーマに、プレゼンテーションや意見交換を行い、相互理解の促進を図りました。

ムンバイでは、現地の経済シンクタンクによるインド経済の概要説明や、アジア最古の歴史を誇るボンベイ証券取引所を訪問し、インド経済の現



経済都市ムンバイでも、ローカル市場は今も活況



インフォシステクノロジーズの様子

状および今後の展望等を伺いました。また、横浜市との姉妹都市交流など、日本との交流に長い歴史をもつムンバイ市役所を訪問して、今後の自治体間の交流の可能性等について意見を交わしました。

バンガロールでは、インドでも有数のIT企業である「インフォシステクノロジーズ」を訪問し、インドのIT企業のダイナミズムを体感するとともに、このようなIT企業に優秀な人材を輩出する工科大学院を訪問しました。最後に、現地企業との合弁で精紡機や自動車部品を製造する「KIRLOSKAR TOYODA TEXTILE MACHINERY PVT. LTD.」を訪問し、人材育成やパートナー企業の重要性など、インドへの企業進出に関する様々なポイントを伺いました。

おわりに

当プログラム終了後に参加者を対象に行ったアンケート調査では、「現地を視察することにより、経済成長を肌で感じる一方、スラムなどの問題を抱え、裕福と貧困が隣り合うインドの一面を見ることができた」、「企業視察や現地関係者との意見交換を通じて、地元中小企業の現地進出における課題等が理解できた」などの評価をいただき、インドの現状を理解し、今後の交流の契機とするという所期の目的はおおむね達成されたものと考えています。なお、プログラムの詳細は、今後、当協会シンガポール事務所ホームページなどにてお知らせする予定です。

(<http://www.clair.org.sg/j/index.html>)